



京都府南丹市美山町北村地区【10月7日】 かやぶきの里美山町

美山町の人口は昭和30年のピーク時には1万人であったが、現在は4,700人程度で、65歳以上の人の割合である高齢化率は、39%。冬の積雪は多く、除雪車が必要なほどの地域もあるらしい。限界集落は10地区。平成の大合併により近隣4町で合併し、南丹市となる。南丹市全体の人口は34,600人、面積は上毛町の5倍ほど。

美山町は、北地区のかやぶき屋根の集落とその景観などを中心に、昭和63年「第3回全国農村アメニティコンクール優秀賞」受賞をはじめ数々の賞を受賞している。村おこしと農村の景観維持が高く評価されている。

平成5年には、「グリーンツーリズム整備構想策定委員会」を設け、モデル構想を策定して、基本コンセプトは「美山町のもつ美しい農村景観・美山らしさ・住みよい農村空間を形成すること。このことによって、Iターン、Jターン、Uターンを促すこと」である。その効果もあり、Iターン等での定住促進につながっている。

これらと平行し、町づくりの体制としては、平成4年にIターン者向けなどへの土地・住宅のあっせん和供給事業体として「第三セクター美山ふるさと株式会社」を設立(平成13年には新生美山ふるさと株式会社としてJ A美山の事業の一部を引き継いで美山牛乳などの生産、販売を担う特産振興部と定住促進部とに再編した)、また平成5年に「美しいまちづくり条例」を制定するなどが進められてきた。

基本的には、かやぶきの景観を活用したコミュニティ活動が主だが、行政として「住民と議論し、住民と政策をつくり、住民と実施し、その評価を住民と共同で行う」といった地域住民と連携して活動できる体制を築いている点は勉強となる。また集落支援員制度を導入し、5名の支援員を配置し、地域づくりに取り組んでいる点は、今後の上毛町への集落支援員制度導入に参考となりました。



▲美山のかやぶきの里の一斉放水

議会視察研修

宮崎 昌宗



▲「文泉堂」にて

滋賀県長浜市【10月6日】

1.観光都市として蘇った商店街

滋賀県北部に位置する長浜市は、近年まで人口6万人の地方都市で、平成の大合併により周辺郡部を編入し、滋賀県第3位の人口12万人を有します。典型的な地方都市に過ぎなかった長浜が、年間200万人もの観光客が訪れる観光都市として知られるようになったのは、ここ20数年のことです。商店街再生への取り組みは、地域活性化につながるヒントが得られる事を期待し視察を行いました。

町衆自治のまち長浜の栄枯盛衰

浜は羽柴秀吉がはじめて城持ちとなった土地。城下に商人を集めて自治と年貢免除を許し、楽市楽座を開き、長浜は経済的繁栄を遂げた。戦後も一円から人が集まり活気のある町でしたが、車社会と進むにつれ、次第に寂れ、郊外型大型店舗の出店もあり、『人が4人と犬が一匹』と表現されてしまうほどに衰退してしまいます。

2.転機 黒壁スクエアの誕生

平成元年、中心商店街の象徴的な建物で市民に「黒壁」と親しまれてきた「旧百三十銀行」が老朽化から取り壊されることになる。しかし、市民が立ち上がり、第3セクターの会社を設立し、施設を買収し商業施設として運営する(株)黒壁が誕生した。3セクとゆえども初期資本金1億3千万円のうち7割の9千万円が民間出資で集まったのが驚きである。(株)黒壁は商店街の活性化という大義名分がありながらも、事業企業に徹するというスタンスを明確に持ち、地場産業や商店街店舗と競合しない「ガラス工芸」を事業選択する。現在、飲食店・土産店・工房・美術館など11館を直営し、グループ館として黒壁のまちづくりに参画する18館の計29館で活動するまでに成長しています。



商店街も動き出す

黒壁の成功は多くの観光客を呼び込むようになり、商店街も意識が変わっていった。以前は、商店街のイベントは単なる「売り出し」だったが、人集めの為のイベントを開催し、賑わいを創出する事によって、その中で店主が工夫をしなければ商売になるという、発想の転換があった。当初は「客寄せ」の意味合いが強く「商店街主導型」だったが、商店経営者以外の人も関わる「市民参加型」へ徐々に変わっていった。そして商店街は、遊び・社会教育・コミュニケーションの場として「にぎわい」を取り戻していきました。

脱観光客商売

爆発的に観光客が増えたが潤うのは飲食店や土産物店など。地元向けの店は次々と消えていき、観光客向けに業態を変えていった。この現状に書店「文泉堂」を営む吉田氏は、『観光客商売はしたくない。観光客も地元客も客には変わらない。最大限のおもてなしをし、店舗の魅力を伝えるだけ。そうすれば、両方の客をつかむ事ができる』と考える。つまり、どこでもあるような平凡な店では観光客はおろか地元の客も振り向いてくれない。規模や立地に頼らず「自分ならではの個性を大切にされています。

3.「まちづくり役場」という運動

平成8年のNHK大河ドラマ「秀吉」の放送と連動して開催された「秀吉博」。通常はNHKが主導で行う御当地博覧会ですが、計画策定から運営に至るまで市民400名以上のボランティアが参画し大成功を収めました。その市民による「まちづくり」を展開していこうと「NPO法人 まちづくり役場」が誕生しました。事業展開は多様ですが、大きくは①情報発信機能、②ネットワーク機能、③まちづくり研究の3つに分けることができます。

この「まちづくり役場」という取り組みは、現在上毛町で行われている、地域づくり活動団体の次なるステップへ、良いヒントになると感じました。

